

# 兒童遊園に欲しい植物(續)

東京市公園課 末 田 ま す

## 春の七草

誰でも知つてゐる様に七草には春と秋との二いろあるが秋の七草の方は萬葉集に收められた歌などによつて非常に有名なものになつた。

それは秋の七草は觀賞を本位として選ばれたに反し、春の七草は、所謂七種粥として正月七日の朝七種の菜を和して粥を炊くといふ舊習によつて、邪氣を拂ふ食べ物として初まつたもので草花としての觀賞上の價値は殆どないものである。従つて秋の七草の様に單に見るといふ事を専らにし眺に供すといふ點に於て發達したのに及ばない事は勿論であり、又七種粥を食べるといふことの類れた今日では、その七種のものゝ名さへも忘れられるに至つたのも無理からぬ事である。

もとの七種粥の習慣は支那から傳はつたもので古來「せり、なづな、ごぎやう、はこべら、ほとけのざ

すずな、すずしろ、これぞ 七くさ

と呼んでこの七種のものを用いたので「唐土の鳥の渡らぬ先に……」と唄ひながら「俎板を叩いて刻んだものである。この七種を細かく説明すると次の様なものである。

せり	芹	織形花科	宿根草
なづな	薺(べんく)ぐさ	十字花科	二年草
ごぎやう	御形(はこぐさ) 麴草	菊科	同上
はこべら	繁縷(はこべ)	石竹科	同上
ほとけのざ	佛の座(たびらこ、田平子、鷄腸草)	紫草科	宿根草
すずな	菁(かぶらな、蕪菁)	十字花科	二年草
すずしろ	鈴代(だいこん、蘿葡)	同上	同上

これらのものも今日では次第に忘れられて稀に七種粥の

習慣を守る人も僅かに薺と、蕪と、大根と、芹を用ふる位に止まつており又何でも七種類あればよいといふので、午莠、人參なども用ひられている様である。

食用とする以外近代になつて浅い鉢に寄植として眺める人も稀にはあつた様で

あるが、又向島の百花園などで綺麗な葩に寄植として客の需めに應じた事もあつたが、可憐の趣のみ得られるだけで美しさといふものは、あまり感ぜられないので、これは極く數寄者に限られていた様である。

以上述べた様に觀賞に供する爲にはあまり大したものではないが、兎にも角にも「春の七草」として古來、誰でも口にするものであるから、常識として子供にも覚えさせる

様に、そして東京郊外などで何時でも採集出来るものから、その折々に集めて一ヶ所にまとめて植えておく事も又一面意義ある事であらうと思はれる。

## 秋の七草

秋の七草は古より人口に膾炙している。

然し此七草の種類については古來、色々の説があるのでこれと斷定する事は出来ないものであるが、要するに似たり寄つたりのものであるから萬葉集にある山上憶良の七草の歌に基すくものとすれば次の七種である。憶良の歌とは



(一の草七の秋) まかばちふ

はぎがはな、をばな、くづはな、なでしこのはな  
おみなへし、またふぢばかま、あさがほのはな。

といふので、即ち

は ぎ 萩 荳 科 灌木  
 を ば な 尾花(すゝき、芒) 禾 本 科 宿根草

く す 葛 荳 科 同上

な で し こ 撫子 石 竹 科 宿根草

お み な へ し 女郎花 敗 醬 科 同上

ふ ぢ ば か ま 藤袴(蘭草) 菊 科 同上

あ さ が ほ — 不 明 —

の七種であるが、此うち最後の「あさがほ」は今の朝顔であるか、桔梗であるか龍膽であるか夫々の説があり疑問とされているが大體桔梗であらうとして、一般にそう取扱はれている。

之等の七種は何れも花の色が淡白で、草莖の性質は繊細で、やさしく美しく、野趣横溢している所が、淋しみとか澁味とかを好む我國民性に合致し、然も時候のよい時でもあるので今日まで持てはやされ歌に詠まれ文に作られて賞美される所以であらうと思はれる。

秋の七草も、春の七草同様、東京附近にてよく採集出来るものであり、又購入するにしても僅かの費用で揃へ得る

ものであるから、これは是非遊園内に相當廣く群落的に欲しいものである。

.....◆.....

此外日本産花瓣として五指を屈すべき椿、茶梅、牡丹、芍薬、花菖蒲、蓮、櫻草等、外國産のものにて代表的な、ライラック、花木水、ダリア、カンナ、グラデオラス、スナイトピー、ヒヤシンス、わすれなぐさ、睡蓮等を植えるとか、或は日本の花札によつて月々のものを、又外國の花言葉によつて適當な種類を選ぶとか、なるべく子供の頭に直ぐ響く様な方法によつて各種の植物を植付け美觀の上からも、又教材としての上からも兒童遊園内を充當せしめたものである。(終)

x x x

x x x